

平成24年度 C中学校

研究テーマ

特別支援教育の深化充実により、全校生徒に人間尊重の教育を推進する

1. 課題設定の趣旨

生活指導上の困難さを示す生徒について、個々の生徒が抱える困難さについて理解を深め、今後の指導について研修する。また、全校生徒への理解啓発と人間尊重の意識を高める。

2. 実践・研究の計画、方法

(1) 生徒の適切な実態把握…障がい理解のための研修

ア アンガーマネジメント研修

イ 特別支援教育コーディネーターによる研修

ウ アンガーマネジメント研修を受けての研究授業

エ 巡回によるアドバイス

生徒指導を要する生徒に潜む発達障がいの実態把握

(2) 継続した関係諸機関との連携

家庭児童相談員や区の担当者、スクールカウンセラー等との連携

3. 実践・研究の内容

(1) 巡回によるアドバイス

2・3年の教室に入ることのできない生徒について、実態把握とアプローチの手法などのアドバイスを受けた。厳しい言葉での指導が発達障がいのある生徒にとって有効な方法ではないことが理解でき、生徒に寄り添った指導を行うことで暴力的な行動が抑えられるようになることがわかった。

(2) アンガーマネジメント研修

全職員を対象にした「怒りの感情コントロールについて」のアンガーマネジメント研修を行った。脳科学からの知見や怒りの感情をコントロールするための戦略など教職員のスキルアップに大いに役立つものであった。

(3) 特別支援教育推進委員会

・回数 毎月1回

・メンバー構成：校長・特別支援教育コーディネーター・教頭・1年所属・2年所属
3年所属・特別支援学級担任・生徒指導主事

特別支援学級在籍生徒と入り込み支援の必要な生徒についての情報交換および個別の教育支援計画、個別の指導計画の評価と見直しを行っている。学校での評価や進学につい

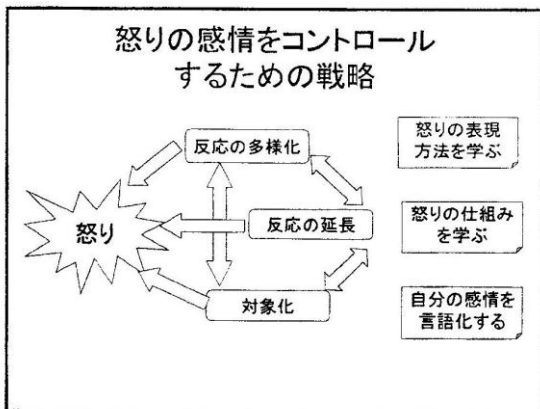
でも検討している。

(4) 特別支援教育コーディネーターによる研修

3月に発達障がい研修としておこなった。最初にクイズ形式で発達障がいに対する理解度をチェックし、教職員がいかに分かっているつもりで分かっていなかったかを理解した。さらに教科別に分かれて、いろいろな場面設定の中、LD・ADHD及び自閉症についての対応を考え発表した。まず、様々な意見交換の結果、生徒を理解したうえで対応することの大切さが理解できた。


(5) アンガーマネジメント研修を受けての研究授業

2月に行われたアンガーマネジメント研修で取りあげられた「怒りの温度計」を活用し道徳の授業の中で研究授業を行い、本校教員と教育委員会からも教育指導員が授業を参観した。



感情の道具箱を使いこなす

- ・「友だちににらまれた。」
- ・「体育の実技で失敗して笑われた。」
- ・「友だちに無視された。」
- ・これらの状況でどれくらいの怒りを感じるかを怒りの温度計で示させ、どうすれば気持ちを静めるかを考えさせます。




私の気持ち

怒りの気持ち
そのとき、どうする？

できごと

道具箱を使い！



まとめ

- ・もう中学生だからとあきらめないで！
- ・特性に配慮した話し方、伝え方でいきましょう。
- ・最初からから指導しようとするのではなく、まずは子どもの言い分にしっかりと耳を傾けましょう。
- ・全ての人が彼らのサポーターに！
- ・勇気を持って彼らの背中を押してやってください！
- ・私たちが元気を出してやりましょう！

「友だちににらまれた。」「体育の実技で笑われた。」「友だちに無視された。」などの具体例から自分の怒りがどの程度であるかを考え、どうすれば気持ちがおさまるかを考えさせた。また、「感情の道具箱」として気持ちを落ち着かせるための方法も考えさせた。その結果、まわり生徒もどんなことがトラブルの原因になるかを感じることができた。

(6) ケース会議

区の子育て支援室やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと連携しながら、様々な部分で支援を要する生徒のケース会議を行った。区の子育て支援室とつながることで

家庭環境に関する情報の共有や連携によるアプローチで改善を図った。発達障がいのある生徒の家庭の問題を解決することも大切な支援となる。

4. 実践・研究のまとめと今後の課題

生活指導上の問題を示す原因の1つに、個々の生徒が抱える困難さがある。アンガーマネジメント研修の後、指導に従いにくい生徒に対するアプローチの仕方を変えたことにより、今まで衝突していた事案が減少している。たとえば、今まで大きな声で怒られたり、否定的な投げかけによって生徒自身がパニックを起こし、自分自身どうしていいかわからずに、攻撃的な行動をとることが多かった。そのために対教師暴力の件数も多かったが、対応方法を知り実践する中で確実に暴力的な行動は減少している。また、生徒に「怒りの温度計」や「感情の工具箱」などを指導することで周りを含め、発達障がいのある生徒に対しての対応ができるようになってきている。

特別支援教育コーディネーターによる教職員研修では、生徒への理解を深め、単なる障がい名ではなく、生徒一人一人について理解を深めていくこの大切さを教職員が理解できた。

今後の課題として、生徒理解を深めるために発達障がいについての見識を深め、生徒一人一人を理解する必要がある。また、特別支援教育推進委員会、ケース会議を単なる報告会ではなく、教職員全員が共通認識のもと、必要な支援をできる場にしていかねばならない。